

新温泉町

旭町白川橋遺跡

-二級河川味原川床上浸水対策特別緊急事業に伴う発掘調査-

2006年3月

兵庫県教育委員会

新温泉町

あさひまちしらかわばし
旭町白川橋遺跡

-二級河川味原川床上浸水対策特別緊急事業に伴う発掘調査-

2006年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

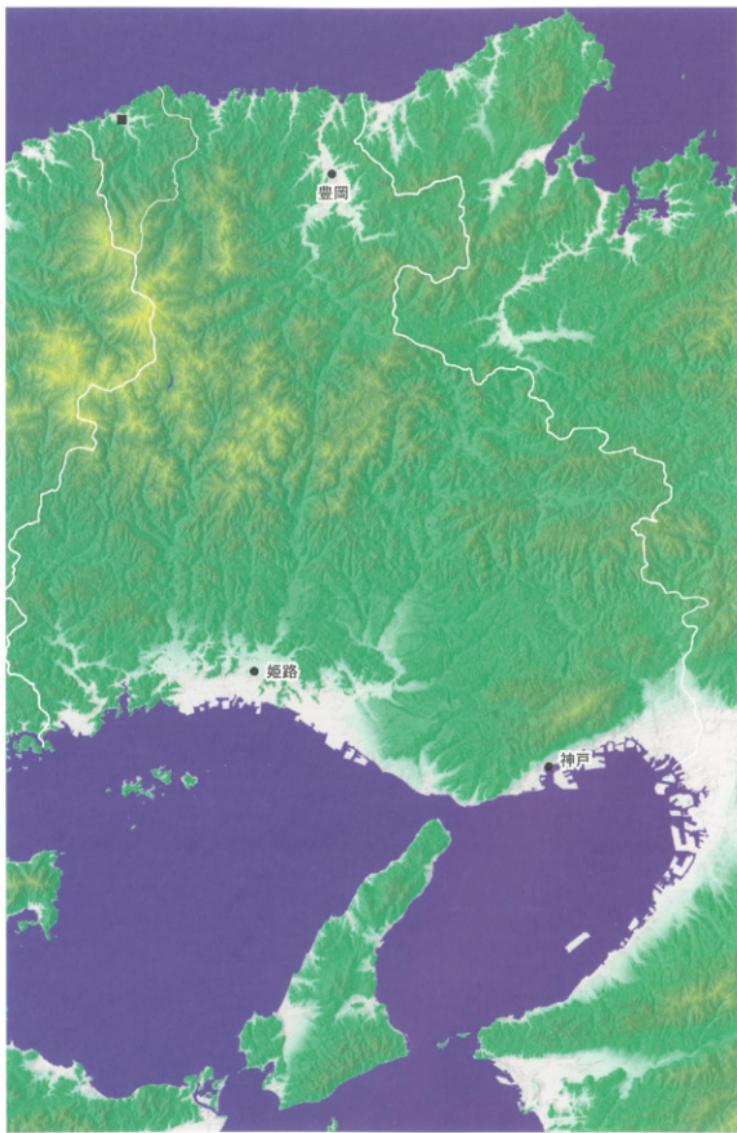
1. 本書は、美方郡新温泉町浜坂に所在する旭町白川橋遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、二級河川味原川床上浸水対策特別緊急事業に先立つもので、兵庫県浜坂土木事務所からの委託を受け、兵庫県教育委員会が平成12年度に第1次確認調査を、同年度に第2次確認調査を実施した。このうち、本報告は、第2次確認調査の成果を報告するものである。
　第1次確認調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所藤田　淳・服部　寛が、第2次確認調査は同山田清朝・多賀茂治が担当した。なお、本発掘調査の遺跡調査番号は、第1次が2000008、第2次が2000208である。
3. 造構の写真撮影は調査員が、実測は調査員が実施した。
4. 整理作業は、平成16年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
5. 遺物の接合・実測・復元トレースについては上記事務所整理保存班で行った。
6. 遺物写真の撮影は、谷口フォトに委託し、平成16年度に行った。
7. 樹種同定は、株式会社パレオ・ラボに委託し、平成17年度に行った。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版とともに統一している。
10. 本書の編集は増田麻子の補助を得て山田が行い、第3章を除いては、全て山田が執筆した。
11. 本報告にかかる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
12. 最後に、発掘調査および報告書の作製にあたっては、川夏晴夫氏（新温泉町教育委員会）の御援助・御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表するものである。

目 次

第1章 旭町白川橋遺跡	1
第1節 遺跡の環境	1
第2節 調査の経緯	8
第2章 調査の成果	11
第1節 出土遺物	11
第2節 基本土層と遺物の出土	27
第3章 旭町白川橋遺跡出土木製品の樹種同定	31
第4章 まとめ	35

挿図目次

第1図 遺跡の位置	ii	第19図 出土土器写真（2）	16
第2図 新温泉町	1	第20図 出土土器写真（3）	17
第3図 岸田用水系図	2	第21図 出土土器実測図（3）	18
第4図 味原川水系図	3	第22図 出土土器実測図（4）	18
第5図 味原川流域（觀音山から）	3	第23図 出土土器写真（3）	19
第6図 遺跡周辺地形図	4	第24図 出土木製品（1）	21
第7図 浜坂平野	5	第25図 出土木製品（2）	22
第8図 主要周辺遺跡	6	第26図 出土木製品（3）	23
第9図 改修後の味原川（JR山陰線北側）	8	第27図 出土木製品（4）	24
第10図 改修後の味原川（調査地付近）	8	第28図 出土石器写真	25
第11図 工事計画	8	第29図 出土石器	26
第12図 調査前	9	第30図 基本土層図	27
第13図 調査位置図	9	第31図 埋没過程（1）	28
第14図 第2次確認調査	10	第32図 埋没過程（2）	29
第15図 全景（第2次確認調査）	10	第33図 旭町白川橋遺跡出土木製品材組織の 光学顕微鏡写真（1）	33
第16図 出土土器実測図（1）	12	第34図 旭町白川橋遺跡出土木製品材組織の 光学顕微鏡写真（2）	34
第17図 出土土器写真（1）	13		
第18図 出土土器実測図（2）	15		



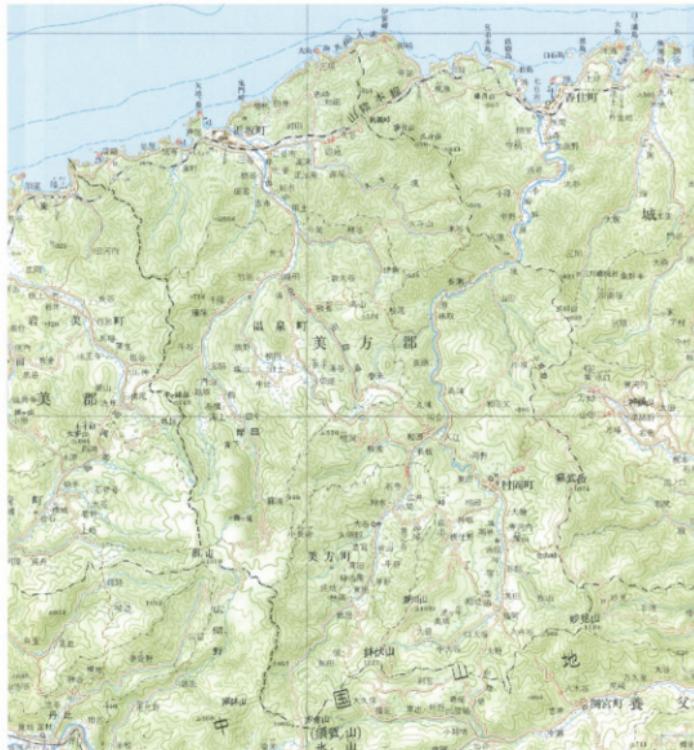
第1図 遺跡の位置

第1章 旭町白川橋遺跡

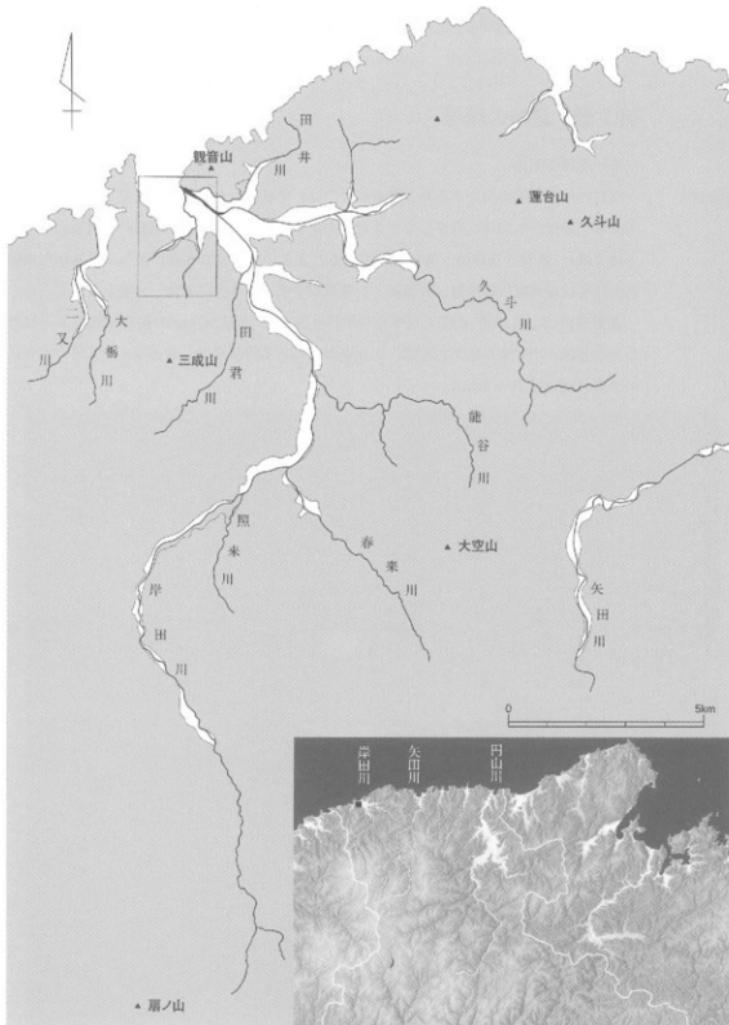
第1節 遺跡の環境

(1) 地理的環境

旭町白川橋遺跡の所在する美方郡新温泉町は、平成の大合併により、美方郡浜坂町と同温泉町が平成17年10月に合併してできた町である。新温泉町は、兵庫県の北西端に位置し(第2図)、西側は鳥取県と境をなしている。また、北側は日本海に面し、南側から東側にかけては香美町(香住町・村岡町・美方町が平成17年4月に合併)と境をなしている。新温泉町は、人口約18000人(平成17年11月現在)、面積241km²の規模をほこる。旭町白川橋遺跡の所在する旧浜坂町は、水産業が一つの基幹産業で、ホタルイカとズワイガニの水揚げ高は日本一である。

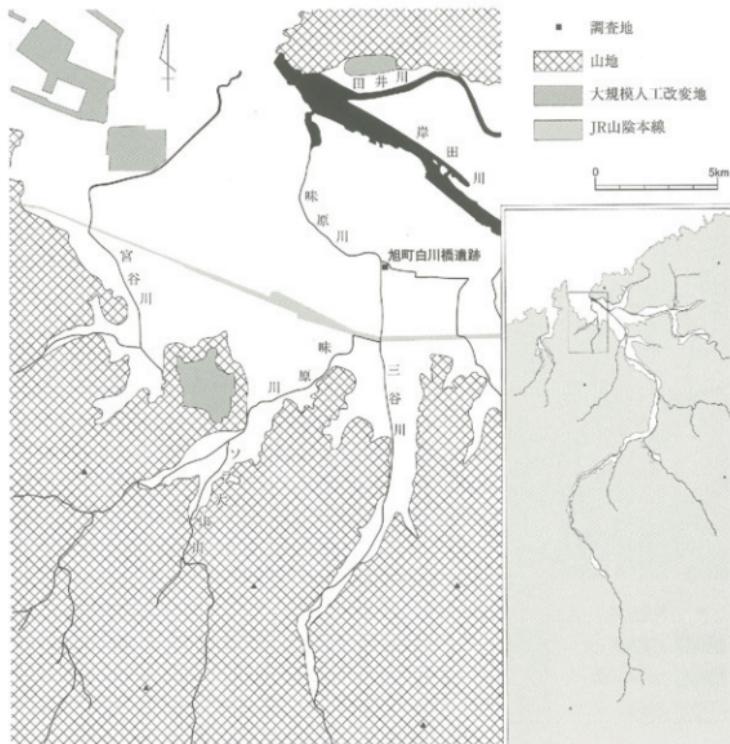


第2図 新温泉町



第3図 岸田川水系図

岸田川 浜坂平野を形成する岸田川は、鳥取県八頭郡の扇ノ山（標高1309m）の東麓（旧温泉町岸田字烟ヶ平高原）を源とする2級河川である。大きく蛇行しながら北流し、浜坂湾（日本海）に注いでいる（第3図）。途中、旧温泉町竹田で照来川、同細田で春来川、同金屋で熊谷川、旧浜坂町七釜で田君川、同清富で久斗川と合流している。最後に、今回報告する



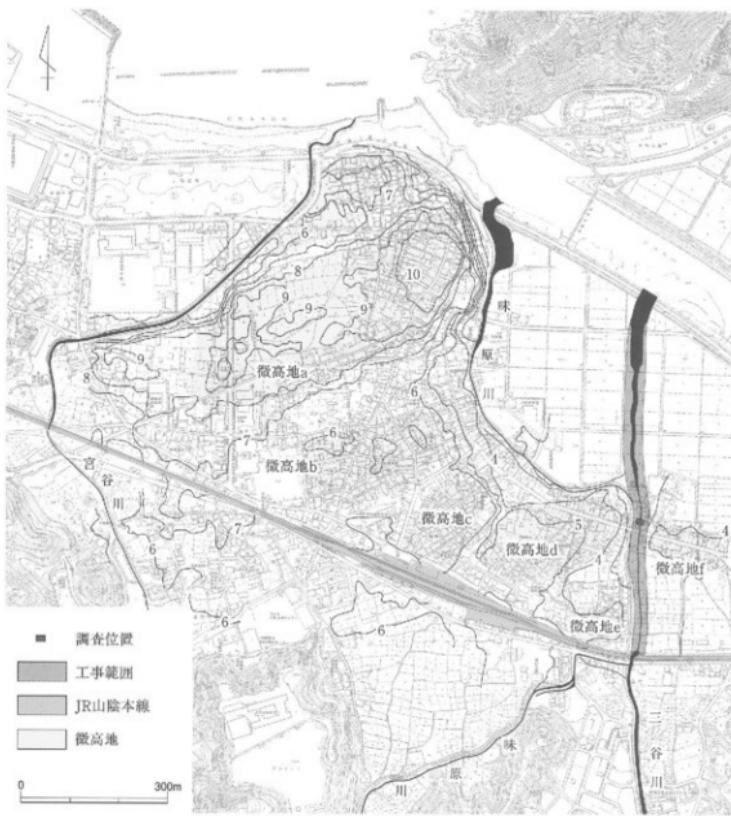
第4図 味原川水系図

調査の契機となった味原川が、岸田川に合流している。岸田川が日本海に注ぐ直前にある。全長23.8kmを測り、その流域面積は21645km²である。

現在、岸田川の支流の一つである味原川は、旧浜坂町南部を源とする、二級河川である（第4図）。南西-北東方向に流下後、途中鰺町で三谷川と合流し、浜坂平野微高地群（第6図）の東端部に沿って流下し、岸田川に合流している。現在は、岸田川水系に組み込まれているが、縄文時



第5図 味原川流域（観音山から）



第6図 遺跡周辺微地形図

代にはラグーンに注ぐ小河川の一つであったものと考えられる。その後、ラグーンの埋没過程で、凹地が河川として残存したものと考えられる。全長2.9kmを測り、その流域面積は4 km²である。

浜坂平野

岸田川によって形成された浜坂平野を中心に発展してきた町が、旧浜坂町である。浜坂平野は、日本海に突き出た矢城ヶ鼻と鬼門崎に挟まれた大きな入り江に形成された平野で、東西方向に伸びがっている（第7図）。

当平野をより微視的に見ると、低地部分と微高地部分（微高地群）から形成されている（第6図）。平野の西側に微高地群が、東側に低地が形成されている。微高地群の大半は、現在の集落と一致する。

低地部分の多くは、縄文時代においてはラグーンであったものと考えられる。微高地部分の多くは、東西方向にのびる砂丘からなるものと考えられ、少なくとも4列を確認することができる。第6図の微高地a～微高地dが該当するものと考えられる。ボーリングデ



第7図 浜坂平野

ータを入手することができなかったが、微高地 e についても砂堆の可能性が高い。特に、微高地 a と微高地 d はその規模が大きなもので、微高地 a は、後述する遺跡（高見遺跡）の分布とほぼ一致する（第8図）。そして、上記ふたつの微高地に挟まれた地区（微高地 b・微高地 c）は、微高地とはなっているものの、微高地群のなかでは、現在でもわずかながら凹地となっている。なお、これらの微高地と現在の市街地はほぼ一致する。

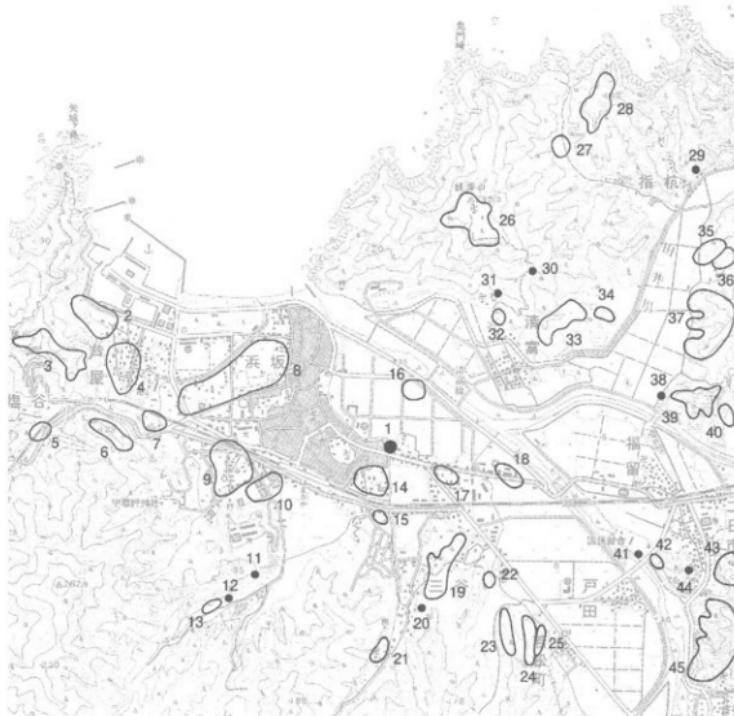
また、これらの微高地群と南側の山地との間は凹地となっている。この地域が、今回の調査の遠因となった水害被災地域とほぼ重なる点が注目される。

旭町白川橋遺跡 当遺跡は、この微高地 d 東端部東側の低地部分に位置するもので、微高地には立地しない。後述するように、これは調査成果（第2章第2節）からも理解できるものである。従観的にみると、味原川によって形成された氾濫原にあたるものと考えられる。これは、調査で明らかとなった砂層が、いずれも亜角礫もしくは亜円礫からなることからも、首肯できるものである。

（2）歴史的環境

旭町白川橋遺跡の所在する浜坂平野においては、埋蔵文化財の発掘調査はほとんど行われていない。このため、多くは表探資料に基づくもので、具体的な内容の明らかな遺跡はわずかである。ここでは、上記の状況を前提として、周辺の遺跡を概観してみたい（第8図）。

- | | |
|-------|---|
| 旧石器時代 | 周知された遺跡はない。 |
| 縄文時代 | 宇都野町遺跡（9）が周知されている。土器片が採集されたのみで、実態は不明である。 |
| 弥生時代 | 宇都野町遺跡（9）・今在家遺跡（7）・高見遺跡（8）・旭町遺跡（17）が周知されている。いずれも、平野に立地する遺跡であるが、土器片が採集されたのみで、実態は不明である。 |
| 古墳時代 | 古墳・集落遺跡・散布地・生産遺跡に分けることができる。 |
| 集落遺跡他 | 殷町遺跡（4）・今在家遺跡（7）・高見遺跡（8）・宇都野町遺跡（9）・岸田川河口遺 |



- | | | | |
|-------------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 鮎町白川橋遺跡 | 2. 芦屋陣屋跡 | 3. 芦屋城跡 | 4. 殿町遺跡 |
| 5. 八山古墳 | 6. イツノ上城跡 | 7. 今在家遺跡 | 8. 高見遺跡 |
| 9. 宇都野町遺跡 | 10. 浜坂駅裏遺跡 | 11. 下山谷古墳 | 12. 味原塗跡 |
| 13. 味原林谷古墳群 | 14. 八幡遺跡 | 15. 秋葉台遺跡 | 16. 岸田川河口遺跡 |
| 17. 鮎町遺跡 | 18. 福富遺跡 | 19. 三谷遺跡 | 20. 上稻葉古墳 |
| 21. 清泉寺遺跡 | 22. 浜坂保健所裏遺跡 | 23. 和泉谷古墳群 | 24. 浦谷古墳群 |
| 25. 漆原古墳群 | 26. 観音山城跡 | 27. 余城遺跡 | 28. 糸城跡 |
| 29. 指杭古墳 | 30. 観音山2号墳 | 31. 観音山3号墳 | 32. 清富陣屋跡 |
| 33. 風呂谷古墳群 | 34. 丸田古墳群 | 35. 鶴山古墳群 | 36. 猪瀬古墳群 |
| 37. 飛宣谷古墳群 | 38. 二方古墳 | 39. 本居下岡住古墳群 | 40. 丹辺谷遺跡 |
| 41. 戸田の石棺 | 42. 戸田古墳群 | 43. 井ノ谷古墳群 | 44. 国正寺裏古墳 |
| 45. 浅谷下山古墳群 | | | |

第8図 主要周辺遺跡

跡（16）・八幡遺跡（14）・秋葉台遺跡（15）・福富遺跡（18）・三谷遺跡（19）・清泉寺遺跡（21）・浜坂保健所裏遺跡（22）が、周知されている。

古墳 八山古墳（5）・下山谷古墳（11）・味原林谷古墳群（13）・上稻葉古墳（20）・和泉谷古墳群（23）・浦谷古墳群（24）・漆原古墳群（25）・觀音山古墳群（26・30・31）・指杭古墳（29）・風呂谷古墳群（33）・鶴山古墳群（35）・猪瀧古墳群（36）・飛宣谷古墳群（37）・本居下岡住古墳群（39）・井ノ谷古墳群（43）・浅谷下山古墳群（45）が周知されている。

井ノ谷古墳群では、昭和61年度に調査が行われ、古墳時代前期～中期にかけての円墳・方墳が検出されている。このなかで、3個体の山陰系壺による土器棺が検出されている。和泉谷古墳群・浦谷古墳群・漆原古墳群は、尾根上に階段状に立地する方形の古墳である。猪瀧古墳群は円墳からなり、1基は石室が露出している。また、鶴山古墳群の各古墳とも石室が露出している。

生產遺跡 味原窯跡（12）が周知されている。須恵器片の散布が確認されている。

奈良時代 般町遺跡（4）・高見遺跡（8）・宇都野町遺跡（9）・浜坂駅裏遺跡（10）・味原窯跡（12）・八幡遺跡（14）・秋葉台遺跡（15）・岸田川河口遺跡（16）・清泉寺遺跡（21）・糸城遺跡（27）が周知されている。

平安時代 般町遺跡（4）・高見遺跡（8）・宇都野町遺跡（9）・浜坂駅裏遺跡（10）・糸城遺跡（27）が周知されている。糸城遺跡では須恵器が採集されている。

中世 戸屋陣屋跡（2）・芦屋城跡（3）・イツノ上城跡（6）・宇都野町遺跡（9）・觀音山城跡（26）・糸城跡（28）が周知されている。
このなかで、芦屋城跡については、昭和59年度に一部調査が行われている。調査の結果、建物跡・土坑・溝が明らかとなるとともに、中世後半と考えられる土器・硯・刀子等が出土している。

〔参考文献〕

兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』2004

瀬戸谷曉『但馬の古代2』2005

神戸新聞出版センター『兵庫県大百科事典』1983

第2節 調査の経緯

1. 調査の契機

台風19号

平成2年9月の台風19号により、味原川は氾濫を引き起こし、浸水家屋23戸という被害をもたらした。この大災害を契機に、味原川河川改修計画（二級河川味原川床上浸水対策特別緊急事業）が計画されるに至った。

改修計画

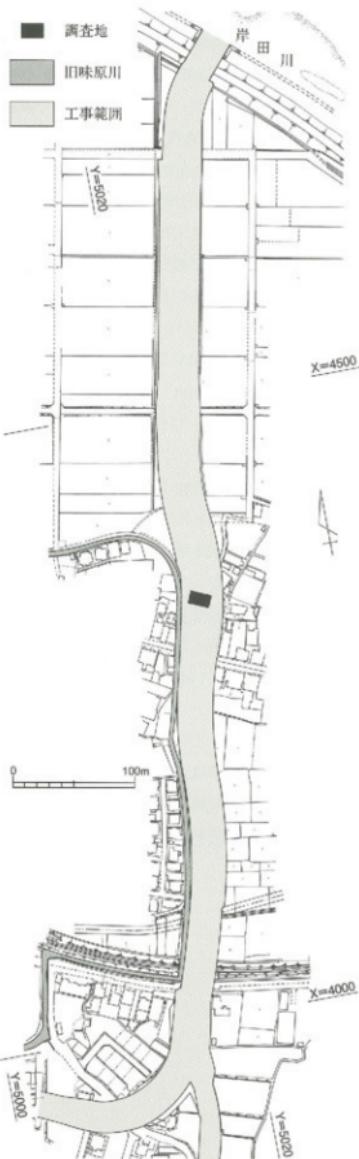
味原川は、旧浜坂町浜坂集落に向かって北流後、JR山陰本線を越えた地点から、山陰本線と平行して東流し、三谷川と合流している。この地点から、北流部分を拡張させ、さらに西側に大きく蛇行する地点から岸田川に直線的に放水路を新設する計画である（第11図）。



第9図 改修後の味原川（JR山陰線北側）



第10図 改修後の味原川（調査地付近）



第11図 工事計画

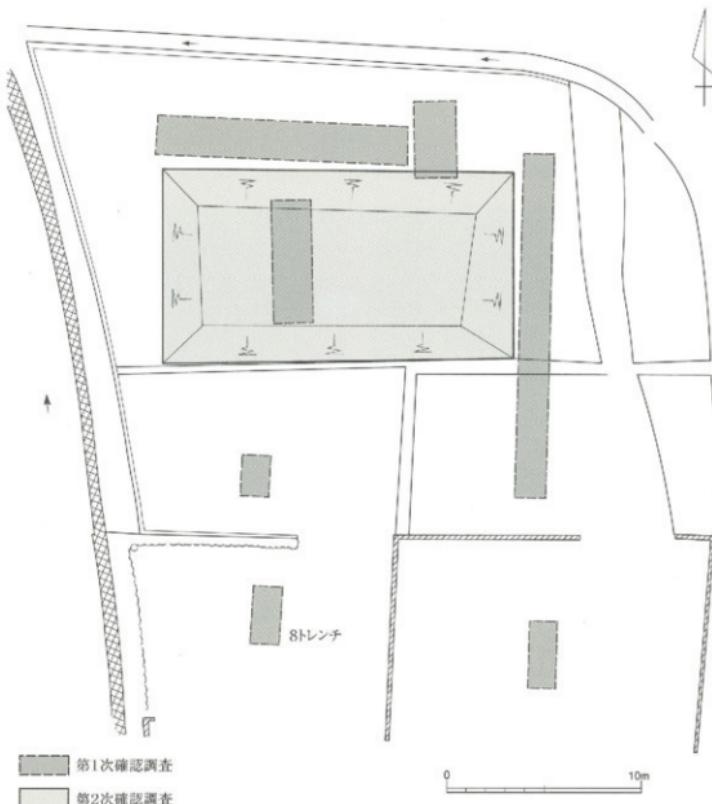
2. 分布調査・確認調査

分布調査 上記工事計画に基づき、平成11年度に分布調査を行った。その結果、県道白川橋付近一帯に埋蔵文化財が包蔵されているものと考えられ、確認調査を実施することになった（第13図）。

第1次確認調査 平成12年5月に実施した。調査の結果、縄文時代晚期と古墳時代初頭の土器が出土するとともに、古墳時代初頭と考えられる加工板



第12図 調査前



第13図 調査位置図

材が出土した。また、堆積状況から、旧味原川の流路跡の可能性が考えられるに至った。ただし、流路跡は検出されたものの、明確な遺構を検出することはできなかった。調査体制等は、以下の通りである。

遺跡調査番号 2000008

調査時期 平成12年5月16日～18日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 藤田 淳・服部 寛

第2次確認調査 平成12年7月に実施した（第14図）。第1次確認調査の結果、遺物の包含が明らかとなつた。しかし、明確な遺構を検出できなかつたこともあり、その範囲を明確にすることはできなかつた。このため、第2次確認調査と称して、調査を実施することとなつた。この調査が、実質的な本発掘調査で、本書はこの調査成果の報告である。

遺跡調査番号 2000208

調査時期 平成12年7月3日～11日

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝・多賀茂治



第14図 第2次確認調査



第15図 全景（第2次確認調査）

3. 整理作業

平成16年度と平成17年度の2箇年にわたっておこなつた。

平成16年度 土器・木製品の実測及びその版作りをおこなつた。また、遺物写真の撮影をおこなつた。

整理担当職員 村上泰樹・山田清朝

整理担当嘱託員 増田麻子・佐々木誓子

平成17年度 石器の実測、遺構図の作製、原稿執筆をおこない、刊行に至つた。また、木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

整理担当職員 森内秀造・山田清朝

整理担当嘱託員 増田麻子・佐々木誓子

第2章 調査の成果

第1節 出土遺物

土器と木製品・石製品が出土している。

1. 土器

縄文時代・弥生時代・古墳時代～飛鳥時代の土器が出土している。

(1) 縄文時代の土器

1～13点出土している（第16図）。器種としては、深鉢と浅鉢他が出土している。

深鉢

1～5・7・8・10・12の9個体である。

1は、内湾する体部に外反する口縁部がつくもので、口縁端部にはキザミ目が施されている。突帯の貼り付けは認められない。口縁部外面には、横方向の細密条痕が認められる。体部外面には条痕文が、内面上半には細密条痕が、それぞれ認められる。また、体部内面下半は、ナデ調整により仕上げられている。内外面とも煤の付着が認められ、外面が特に顕著である。滋賀里Ⅲ b式。

2は、体部上半から口縁部への変換部の一部が残存する。外面には、突帯は貼り付けられていない。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整により仕上げられている。内外面に煤の付着が認められる。また、内面には炭化物が残存している。滋賀里Ⅲ b式。

3は、外面とも粗いナデ調整により仕上げられ、粘土紐痕が顕著である。条痕は認められない。内面全体に、炭化物が厚く付着している。滋賀里式。

4は、口縁部の小片である。外面は黒色磨研が認められる。滋賀里式。

5は、縁部にはキザミ目が施され、内外面はナデ調整により仕上げられている。また、外面には煤の付着が認められる。滋賀里式。

7は、口縁端部外面に突帯が貼り付けられている。内面はナデ調整により仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。船橋式。

8は、口縁部下外面にキザミ目突帯が貼り付けられている。突帯の上側には沈線が施されている。口縁部外面には、条痕が認められる。内面の調整は磨滅のため観察できない。内外面には煤の付着が認められる。滋賀里Ⅳ式以降。

9は、口縁縫部を外方に折り曲げ、突帯状をなし、キザミ目が施されている。内外面ともハケ調整により仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。小片のため、傾き・口径等に不正確な点を考慮した上で、西大井遺跡出土例^①に類例を求めることができ、深鉢に分類した。長原式。

10は口縁部の小片で、口縁部下外面に指頭圧痕文突帯が貼り付けられている。船橋式。

12は、体部の小片である。内面はナデ調整により仕上げられ、外面には条痕が認められる。小片のため、傾きを復元することはできなかった。

浅鉢

6と13の2個体である。

6は、健形口縁を有する浅鉢の口縁部の小片である。端部外面には1条の沈線が施されている。外面はヘラミガキにより仕上げられているが、内面の調整は磨滅のため観察でき

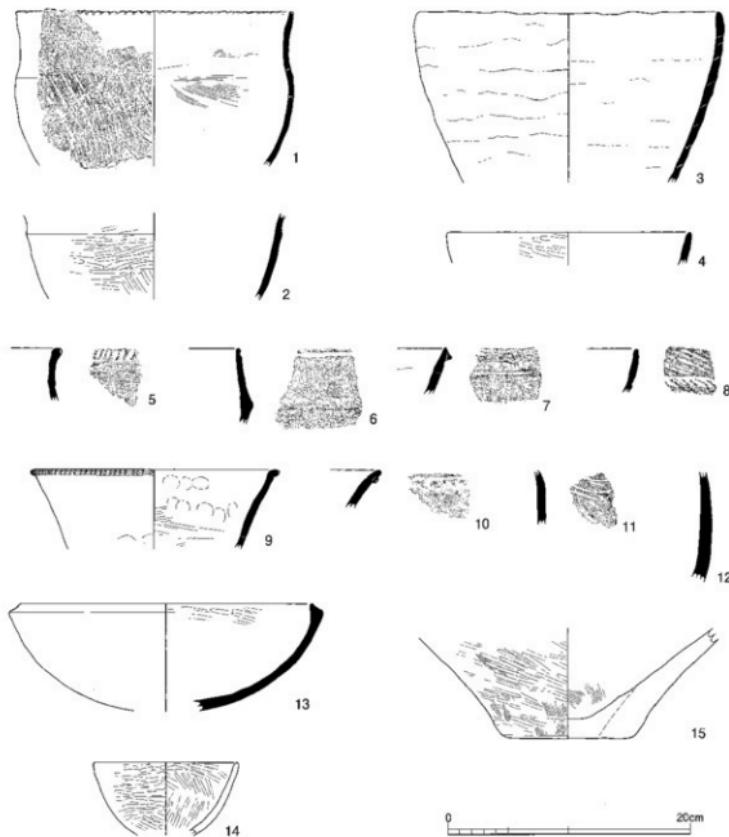
なかった。また、小片のため、傾きを復元することはできなかった。

13は、底部を除いてほぼ完形に復元できる個体である。口縁部内端部を斜上方に拡張させ、内外面とも黒色磨研が認められる。滋賀里式。

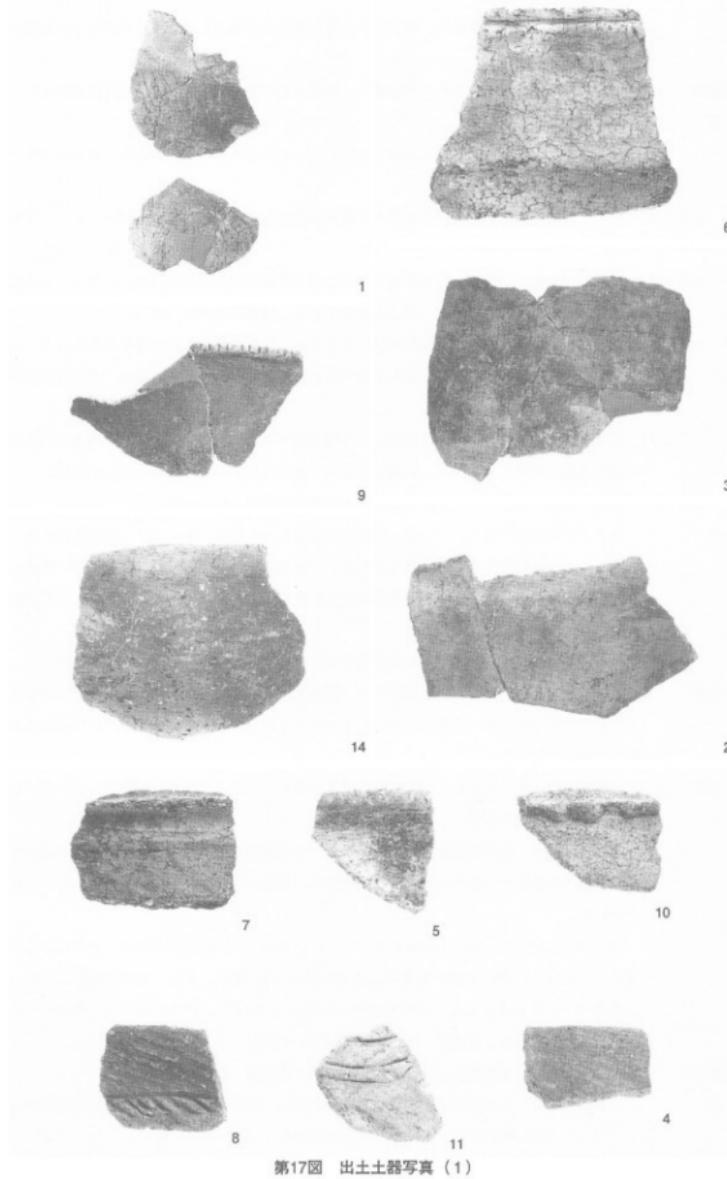
不明 11は、外面に弧状を呈する3条の細い沈線が認められる。

(2) 弥生時代の土器

14と15の2点である(第16図)。14は内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。縄文時代晚期の可能性も考えられる。15は、広口壺の底部で、前期に位置付けられるものである。内面はハケ調整、外面はハケ調整後ヘラミガキにより仕上げられている。



第16図 出土土器実測図(1)



第17図 出土土器写真（1）

(3) 古墳時代の土器

今回報告する土器のなかで、当該期の土器が最も多く出土している。須恵器と土師器が出土している。

須恵器 蓋 16~40の25個体を図化した（第18図）。器種としては、蓋・杯・器台・高杯が出土している。

5タイプに分類できる（a~eタイプ）。a~dタイプについては杯蓋、eタイプについては稜縁の蓋と考えられる。

aタイプ 16の1個体である。天井部全体にヘラ削りが施されているが、口縁端部はシャープさを欠く。

bタイプ 17~24の8個体である。いずれも天井部にはヘラ削りは施されていない。18のみ天井部にナデ調整が施されているが、他は未調整である。口径は12.5cm~15.7cmである。

cタイプ 31・32の2個体である。口縁部内面に返りを有するもので、杯Gの蓋と考えられる。31の天井部には、宝珠形のつまみが貼り付けられている。31の口径は10.6cm、32の口径は7.8cmである。

dタイプ 33の1個体である。天井部は全面にヘラ削り後カキメが施されている。天井部と口縁部を画する境に稜は認められず、口縁端部は丸く納められている。口径は9.2cmである。

eタイプ 34の1個体である。天井部に環状のつまみが貼り付けられている。

杯 2タイプに分類できる。一つは、杯Hに分類されるもので、25~30の6個体図化した。杯蓋bタイプに対応するものと考えられる。口径は9.6cm~12.8cmを測る。底部はいずれもヘラ切りにより切り離され、ナデ調整が加えられている。また、28の底部にはヘラ記号が認められる。

もう一つは、杯Aもしくは杯Bに分類されるもの（35）で、口縁部を中心に残存する。

器台 36の1点出土している。口縁部を中心に残存する小片で、ひずみが激しく口径を復元することはできなかった。内外面とも回転ナデにより仕上げられているが、外面下部にヘラ削りが施されている。

高杯 4個体（37~40）出土している。長脚で2段透かしの37と、透かしが施されない38~40の2タイプに分類できる。

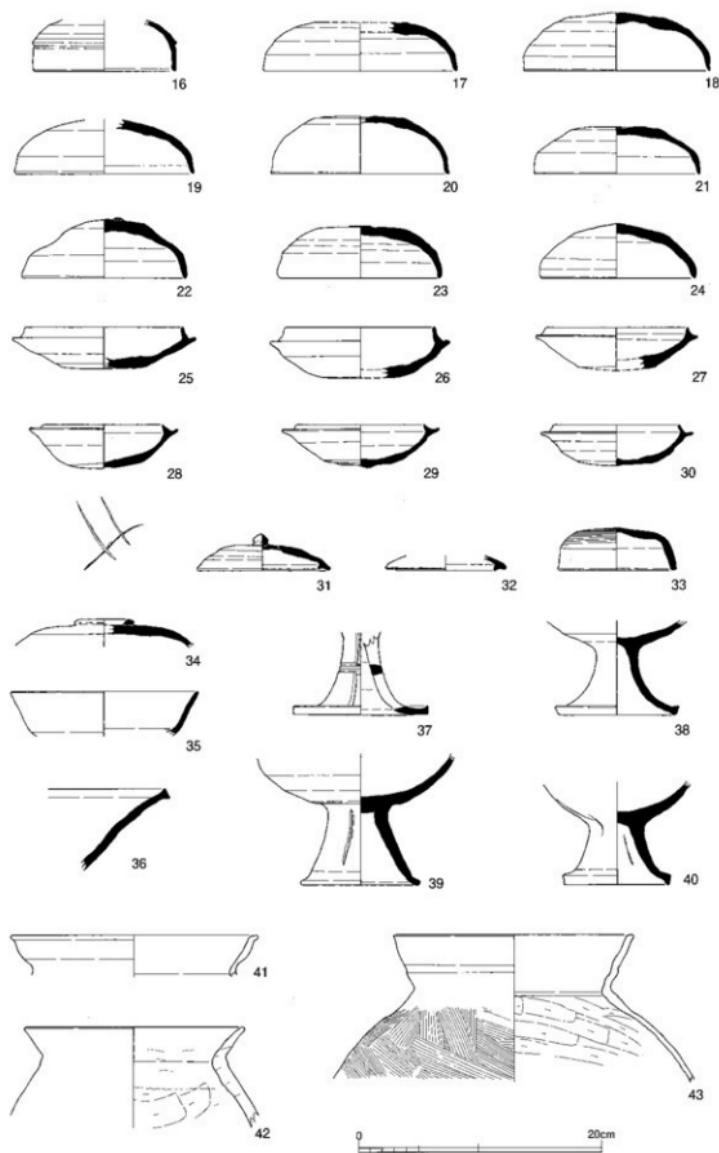
37については、長方形透かしが上下2段に、各2箇所ずつ穿たれている。上下の透かしは、2条の沈線により画されている。時期的に、杯蓋bタイプ・杯Hに対応するものと考えられる。

38~40については、透かしが穿たれていない。なお、39の脚部外面には、ヘラによると考えられる深い筋状の沈線が2箇所に認められる（第20図）。また、40の脚部内面にも、同様のヘラによる切り込みが2箇所に認められる（第20図）。两者とも、長方形透かしの痕跡とも考えられる。杯部は、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

土師器 壺 壺・壺・高杯・土鍤が出土している（第18図・第21図・第22図）。

壺 7個体分（41~45・50・51）図化することができた。口縁部の形態から、複合口縁の壺（aタイプ）、く字形口縁の壺（bタイプ）、布留式系の壺（cタイプ）、に分けることができる。

aタイプ 43・44の3個体である。43については、口縁部下半にわずかに複合口縁の形態をとどめ



第18図 出土土器実測図（2）



18



22



20



24



26



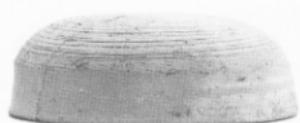
28



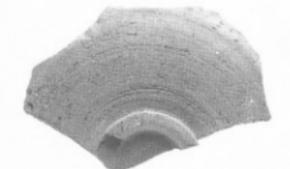
29



30



33



34

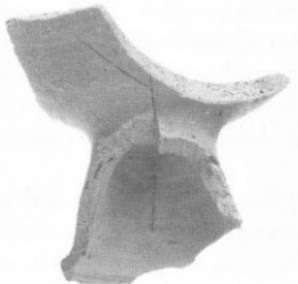
第19図 出土土器写真（2）



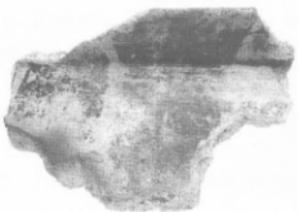
38



39



40



42

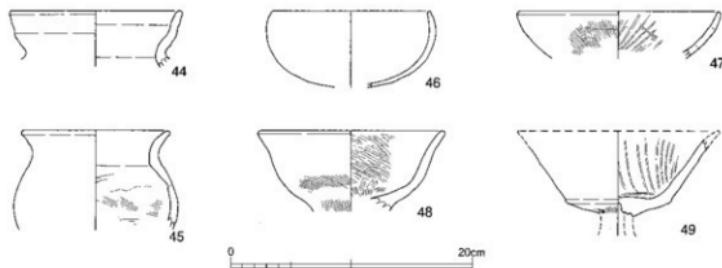


43

第20図 出土土器写真（3）

るものである。体部内面をヘラ削り、外面をハケ調整後、口縁部内外面がハケ調整→横ナデ調整の順に仕上げられている。44は、形態的には壺の可能性も考えられるが、外面に煤が付着しているため、壺に分類した。この土器に関する限り、複合口縁の退化形態と考えられる。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

b タイプ 42・45の2個体である。42は大型の壺で、体部内面はヘラ削り、外面はナデ調整、口縁



第21図 出土土器実測図（3）

部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。45は、小型の甕で、体部内面をハケ調整、外面をナデ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

cタイプ 41・50・51の3個体である。41は、口縁端部を外方へつまみ出すタイプで、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。50と51は典型的な布留式甕で、口縁端部に内傾する端面を有する。体部内面をヘラ削り、外面をハケ調整後、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。また、口縁部内面には、横ナデ調整前にハケ調整が施されている。

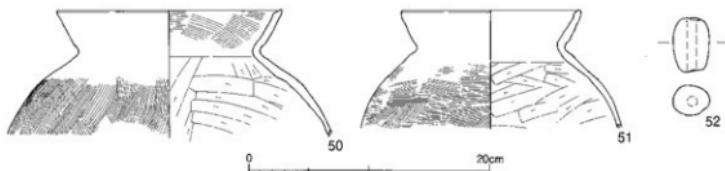
高坏 4個体分（46～49）図化することができた。杯部の形態から、椀形高坏と有稜高坏に分けることができる。

椀形高坏 46と47の2個体である。46は、深い椀形を呈するもので、口縁部を中心に横ナデ調整により仕上げられている。他は、磨滅のため調整を観察できない。天井部全体にヘラ削りが施されているが、口縁端部はシャープさを欠く。47は、浅い椀形を呈するもので、内外面をハケ調整後、内面を暗文状のヘラ磨きが放射状に施されている。

有稜高坏 48と49の2個体である。48は、体部から口縁部にかけての変換部の稜は緩やかである。外面はハケ調整後横ナデ調整により、内面はヘラミガキにより仕上げられている。49は、48に対して体部から口縁部にかけての変換部の稜がシャープである。坏部外面はナデ調整により仕上げられ、内面には暗文状のヘラミガキが放射状に施されている。また、坏部外面は、ハケ調整により仕上げられている。

土錘 52の1点出土している（第22図）。完存するもので、全長5.0cm、最大径3.0cmを測り、緑穴の径は9mmである。

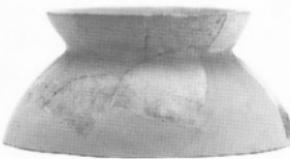
小 結 須恵器の杯の特徴から、古墳時代後期・後期末・飛鳥時代の3時期に細分することができる。



第22図 出土土器実測図（4）



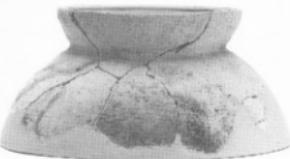
45



50



46



51



49



52

第23図 出土土器写真（3）

2. 木製品

容器・農具・祭祀具・建築部材・武器・他が出土している。

容器 横1点(W1)が出土している(第24図)。底部と両側の立ち上がりがわずかに残存する。底部の形態から、平面形は方形と推定される。残存長は33.5cmで、幅は5.3cm残存する。底部からの立ち上がりは、良好な側で2.8cmを測る。また、底部幅は31.2cm、厚さは0.9cmを測る。スギ。

農具 横柵と鍬先その他の出土している(第24図)。

横柵はW2の1点である。ほぼ完存するもので、全長20.9cmを測る。ただし、握り部長が3.5cmと他遺跡出土例と比較して、極端に短い。また、敲打部先端の磨耗も顕著である。握り部断面はほぼ整円に近く、その規模は3.3cm×3.9cmである。敲打部は、長さ17.4cmを測り、その断面は8.6cm×7.9cmとやや梢円形傾向にある。アカガシ亜属。

鍬先はW3の1点で、曲柄又鍬に分類されるものである。刃部の先端および軸部の端を欠く。刃部と軸部の境は不明瞭であるが、外側にわずかに突起上の変化点が認められる。残存長37.0cmを測り、軸部・刃部の残存長はそれぞれ14cm・23cmである。厚さは軸部で1.0cm、刃部で1.7cmを測る。また、刃部の最大幅は、4.8cmと5.4cmで、その間に最大1.6cmの隙間が認められる。スギ。

祭祀具 刀形1点(W4)が出土している(第24図)。完存し、全長26.5cmを測る。把頭を削り残すことにより把を装着した状態を、刃部は抜き身の状態を表現している。全体的に丁寧に仕上げられている。

刃部長は11.2cmを測り、断面は片刃刀で、棟部は丸く表現されている。棟幅7.5mm、刃部幅2.05cmを測る。把箄は屈曲気味に表現され、把間の長さは3.7cm、把間幅1.1cmを測る。把頭の断面は鋭角三角形をなす。ヒノキ。

建築部材 板梯子の1点(W9)である(第26図)。上端部から2段分残存する。ステップは削り出しにより造られ、全面に手斧痕が顕著である。残存長63.8cm、幅19.5cmを測る。また、板材の厚さは3.7cmを測り、板面からのステップの高さは4cmである。ヒノキ。

武器 W10の1点(第26図)で、丸木弓の可能性があるものである。両端を欠くため、弓と断定することは困難である。残存長73.7cmを測り、断面形は径2.2cmの円形をなす。イヌガヤ。

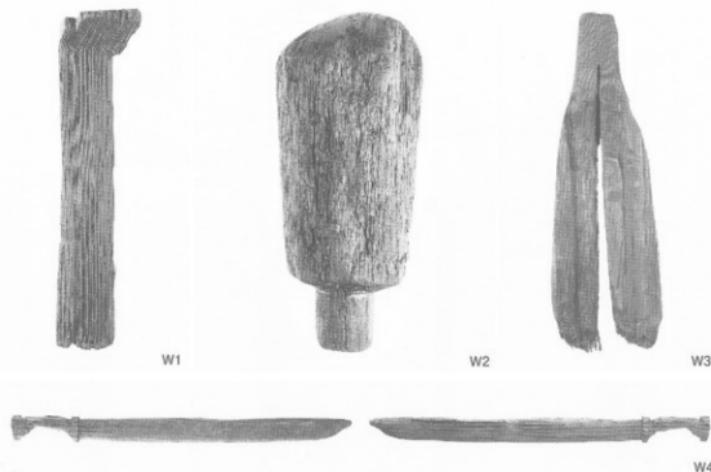
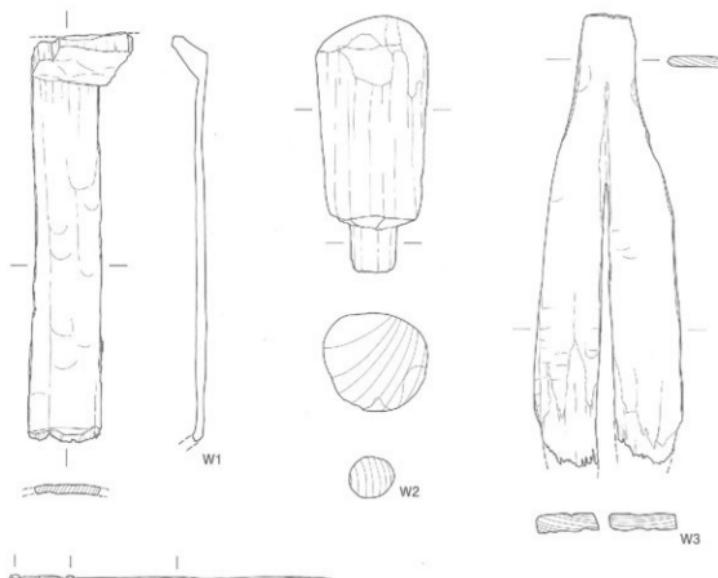
他 W5～W8・W11(第25図・第27図)が出土している。

W5は板状の加工木である。ただし、厚さは1.0cm～1.87cmと一定しておらず、平坦ではない。中央部がわずかに抉られている。最大幅12.0cmを測り、全長は46.1cmを測る。用途は不明である。

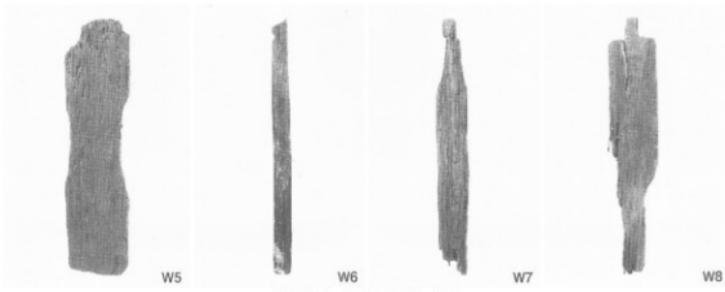
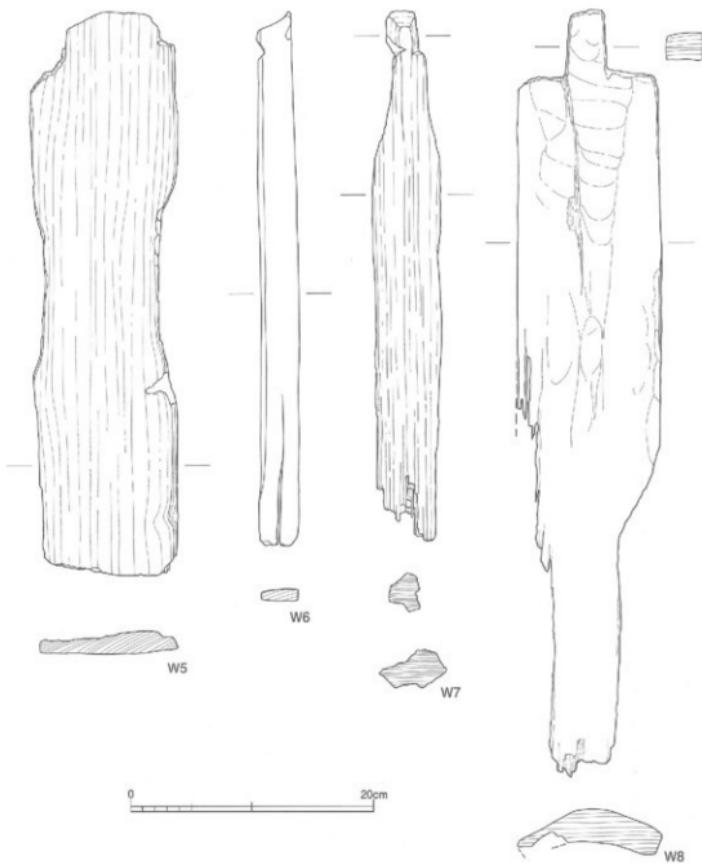
W6は、細長い板状の加工材である。全長43.5cmを測り、幅は3.0cm、厚さは0.9cmである。一端の2箇所に削り込みが施されている。表裏両面は丁寧に仕上げられている。ヒノキ属。

W7は一端を欠き、43.2cm残存する。残存する側は幅が狭くなり、その先端は突起状に削り込まれている。平面的には田下駄の一部とも考えられるが、断面が厚みをもつことから、その用途の特定は困難である。最大幅5.4cm、最大厚3.0cmを測る。スギ。

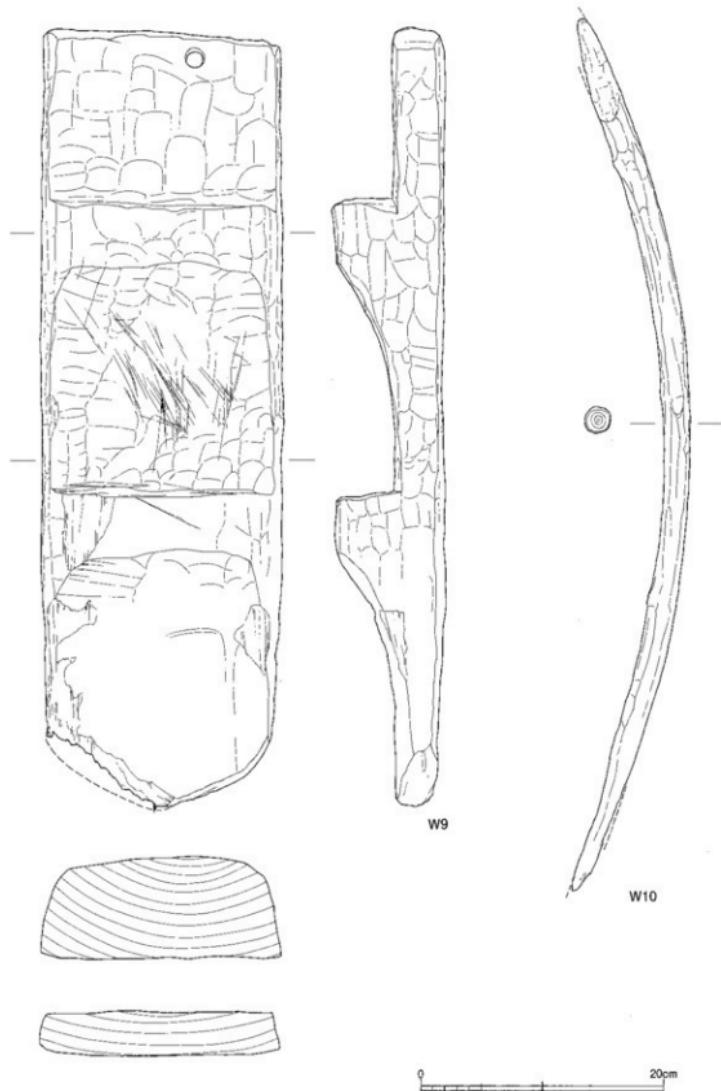
W8は、板材の一端に突起を有するものである。他端は、途中から幅が狭くなり、端部は欠損が著しい。突起は断面長方形をなし、その規模は、幅3.1cm、長さ5.0cmを測る。



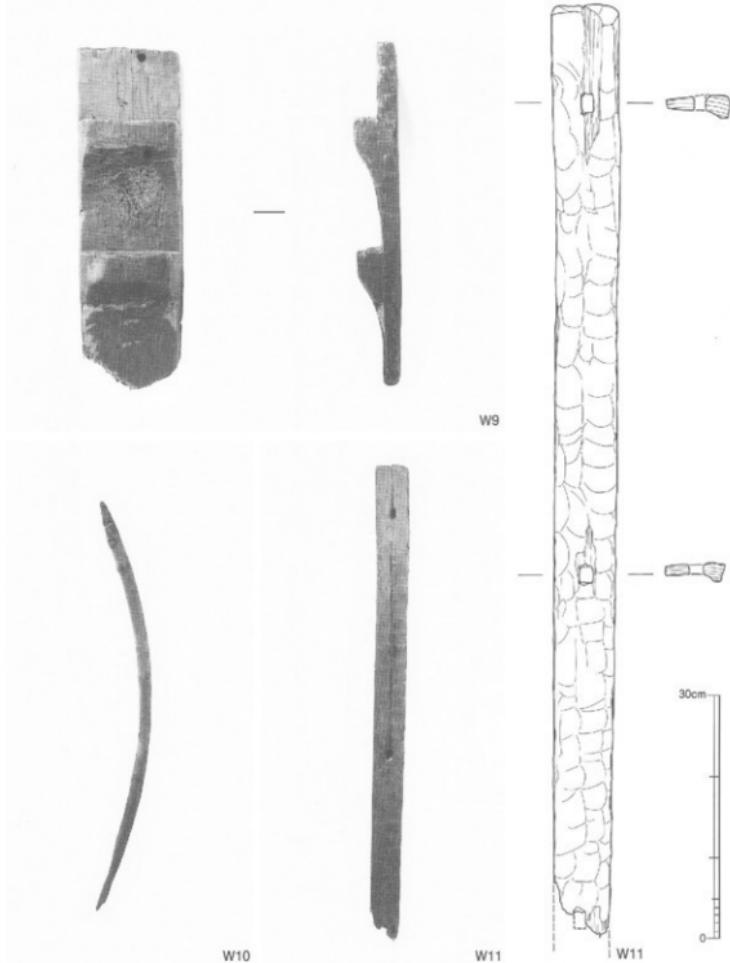
第24図 出土木製品（1）



第25図 出土木製品（2）



第26図 出土木製品（3）



第27図 出土木製品 (4)

残存長は62.5cmで、板材の幅は11.9cmである。板材は平坦ではなく、その断面は弧状をなしている。中央部における厚さは24cmである。ヒノキ。

W11は、幅8.5cmの板材である。ただし、断面形は整っておらず、その厚さは1.4cmから2.8cmと片側が厚くなっている。一端は残存するが、他端は残存しない。全長で1.14m残存する。板材の主軸上には2.0cm×1.4~1.6cmの長方形のはぞ穴が3箇所に明けられている。た

だし、その一つについてはその一部が残存するのみである。また、3穴の間隔は、55cm・40cmと一定ではない。板面には手斧痕が比較的顕著に認められる。用途は不明であるが、建築部材の可能性も考えられる。ヒノキ。

小結 これらの木製品の時期については、遺構に伴うものでなく、特定は困難である。しかし、出土土器から判断して、古墳時代後期を中心とした時期に比定できるものと考えられる。

3. 石製品

大型蛤刃石斧と磨石が各1点出土している（第28図・第29図）。

S1は南西部灰色粗砂層（8層：第30図）から出土した大型蛤刃石斧である。凝灰質砂岩様の重量感のある石材が使用されている。最大幅は体部中央付近にあり、刃部に向かって幅を狭め、刃部幅は体部最大幅の2/3以下となっている。体部断面形は丸みの強い橢円形である。刃部はゆるやかに弧を描き、先端は潰れによって丸みを持つ。研磨はほぼ刃部に限定され、体部はわずかに研磨が及んでいる所もあるが、大半は浅く小さな敲打痕をそのまま残す。敲打は体部側面の一部に横方向筋状のものが観察され、滑り止めを意図したものと考えられる。

S2は第1次確認調査（8トレンチ）で出土した磨石である。安山岩と想われる黒灰色の石材が用いられている。ほぼ全面に使用による磨面が形成されているが、多孔質の石材であるため、アバタ状の小さな窪みが多数残る。明確な敲打痕は認められない。磨面は裏面よりも表面のほうが強く、側面は弱い。下端から表面側に少し寄った部分には、稜を成すほど強く研磨された部分があり、かすかな光沢も認められる。



S2



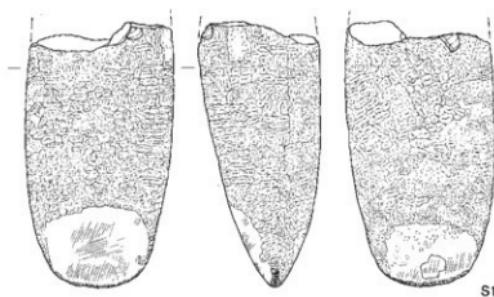
—



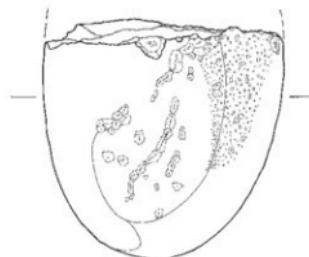
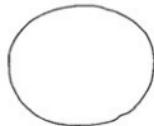
—



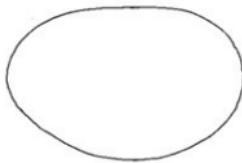
S1



S1



S2



第29図 出土石器

[註]

(1) 大野 薫「大阪府西大井遺跡出土の突帯文上器と弥生土器」『突帯文と遠賀川』土器特集会論文集

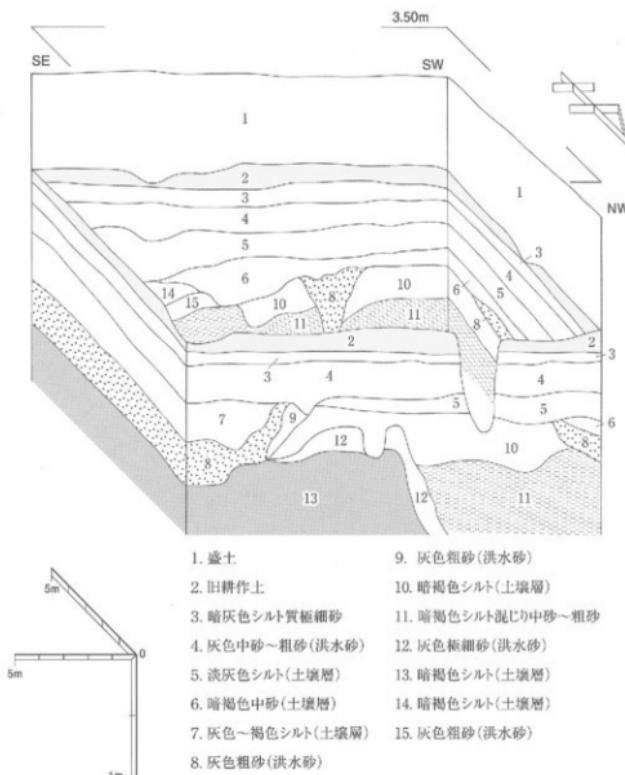
2節 基本土層と遺物の出土

概要

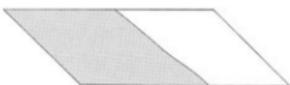
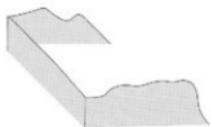
当遺跡は、味原川を中心に形成された氾濫原にあたり、当遺跡の層序は複雑である（第30図）。調査面積180m²と狭い範囲のなかにあって、全域に堆積が認められた層はわずかである。以下、堆積段階（ステージ）ごとに、その堆積状況と出土遺物との対応関係についてみていく（第31図・第32図）。

第Ⅰステージ 今回の調査で検出できた最も古い層は13層で、調査区東半部を中心に認められた。シルト質の土壤層である。堆積は水平ではなく、自然堤防状をなし、東側が高く西側へ大きく落ち込んでいる。

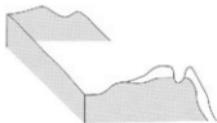
当該層からは縄文時代晩期の土器（第16図）が比較的まとまって出土している。



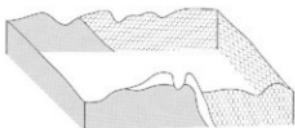
第30図 基本土層図



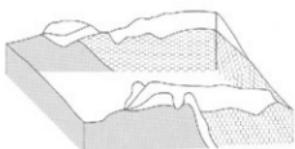
ステージⅠ



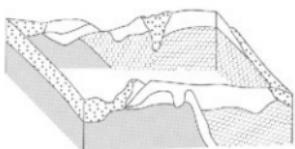
ステージⅡ



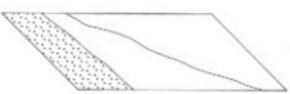
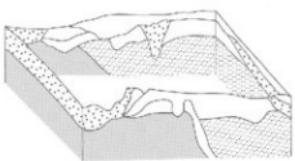
ステージⅢ



ステージⅣ

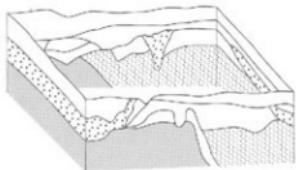


ステージⅤ

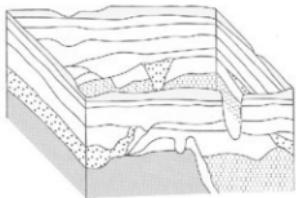


ステージⅥ

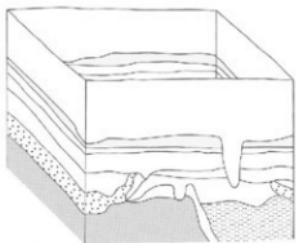
第31図 埋没過程（1）



ステージVII



ステージVIII



ステージIX



第32図 埋没過程（2）

第Ⅱステージ 12層が堆積する。洪水に起因する堆積である。わずかな堆積で、13層の西側肩部を中心¹に堆積する。

第Ⅲステージ 11層が、13層の堆積がわずかであった低地、調査区西部を中心に堆積する。洪水に起因する層で、当層の堆積によりほぼ水平化している。堆積後はしばらく安定していたようで、顯著に土壤化している。

当層からは、古墳時代前期から中期にかけての上器および木製品（第18図～第27図）が出土している。

第Ⅳステージ 10層が調査区西半部を中心に堆積する。その堆積は水平ではなく、自然堤防状をなし、東側・西側に大きく落ち込んでいる。顯著に土壤化しているが、当層からの土器の出土は認められなかった。

10層堆積後、9層・14層・15層が堆積する。いずれも洪水に起因する堆積で、14層はその土壤化した層である。土器が含まれていないため、時期の特定は困難である。14層は、

10層に対応する可能性が高い。

第Vステージ 8層が堆積する。10層の堆積がわずかであった東側・西側を中心に堆積している。特に調査区東側での堆積が顕著である。また、部分的に前のステージで堆積した10層・11層を大きく抉り、明確な流路状をなしている箇所も認められる。洪水に起因する層で、全体的にラミナ状の堆積を確認することができた。ただし、堆積量としては多くはなく、10層が堆積したレベルまで平坦化していない。

当層からは、7世紀を中心とした土器（第18図）が出土している。

第VIステージ 6層が堆積する。6層は洪水に起因する層で、調査区西側の低地を埋めるように堆積している。当層内からは土器の出土は認められなかった。

第VIIステージ 5層と7層が堆積する。自然堤防状の堆積であるが、そのレベル差はわずかで、この段階で調査区全域がほぼ平坦化する。しばらく安定化していたようで、土壤化が顕著である。当層からの土器の出土は認められなかった。

第VIIIステージ 2～4層が堆積する。安定した層で、調査区全域で認められた。2～4層は、基本的に同時期に洪水に起因して堆積した層と考えられる。その後の水田としての土地利用の結果、2層が耕作土として土壤化し、3層が床土層となったものと考えられる。当層内からは土器の出土は認められなかった。

第IXステージ 宅地化のため、盛土・整地が行われる。これが1層である。

第3章 旭町白川橋遺跡出土木製品の樹種同定

植田弥生（バレオ・ラボ）

1.はじめに

ここでは、古墳時代後期を中心とした時期に比定される木製品10点の、樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

木製品から材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の薄片を探取し、すでに作成された材組織標本を、光学顕微鏡で40~400倍に拡大し観察した。

3. 結果

同定結果の一覧を、第1表に示した。

柵はスギ、横柵はアカガシ亜属、鍼先はスギ、刀形はヒノキ、建築部材4点はヒノキ属・ヒノキ（2点）・スギ、板梯子はヒノキ、弓？はイヌガヤであった。

以下に同定根拠とした材組織を記載し、樹種の特徴を簡単に記し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.Koch イヌガヤ科 図版1 1a-1c
(W10:弓?)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。仮道管にらせん肥厚がある。分野壁孔は小型、トウヒ型やヒノキ型、1分野に1~2個である。

イヌガヤは本州の岩手県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。材は緻密で固く小型の器具や細工物などに使われる。種子からは油が取れるが悪臭がある。材は純文時代から弓に用いられている。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版1 2a-2c (W3:鍼先)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量が多く晩材の仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく梢円形に開いたスギ型で1分野に主に2個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。

第1表 旭町白川橋遺跡出土木製品の樹種同定結果

試料 No.	器種	樹種	時代
W 1	柵	スギ	古墳時代後期
W 2	横柵	アカガシ亜属	古墳時代後期
W 3	鍼先	スギ	古墳時代後期
W 4	刀形	ヒノキ	古墳時代後期
W 6	建築部材	ヒノキ属	古墳時代後期
W 7	建築部材	スギ	古墳時代後期
W 8	建築部材	ヒノキ	古墳時代後期
W 9	板梯子	ヒノキ	古墳時代後期
W10	弓?	イヌガヤ	古墳時代後期
W11	建築部材	ヒノキ	古墳時代後期

(3) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版1 3a-3c (W8: 建築部材)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少なく、晩材部仮道管の壁の肥厚もスギほど厚くない。樹脂細胞は年輪の後半に分布する。分野壁孔は大きく、孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型で1分野におもに2個が水平に整然と配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ、建築材・曲物などによく使われる。割裂性がよいので材を細く薄く裂き、編傘や籠や屋根葺きなどにも利用される。

(4) ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版2 4a-4c (W6: 建築部材)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量はやや多い。分野壁孔はヒノキ型で1分野に主に2個ある。分野壁孔の孔口は、典型的なヒノキ型と、サワラに見られるような孔口がやや広く開いた隙孔も多くあり、ヒノキとサワラの識別が困難であった。

ヒノキ属は温帯の山林に分布し、本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと、ヒノキより分布域は狭く東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育するサワラがある。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

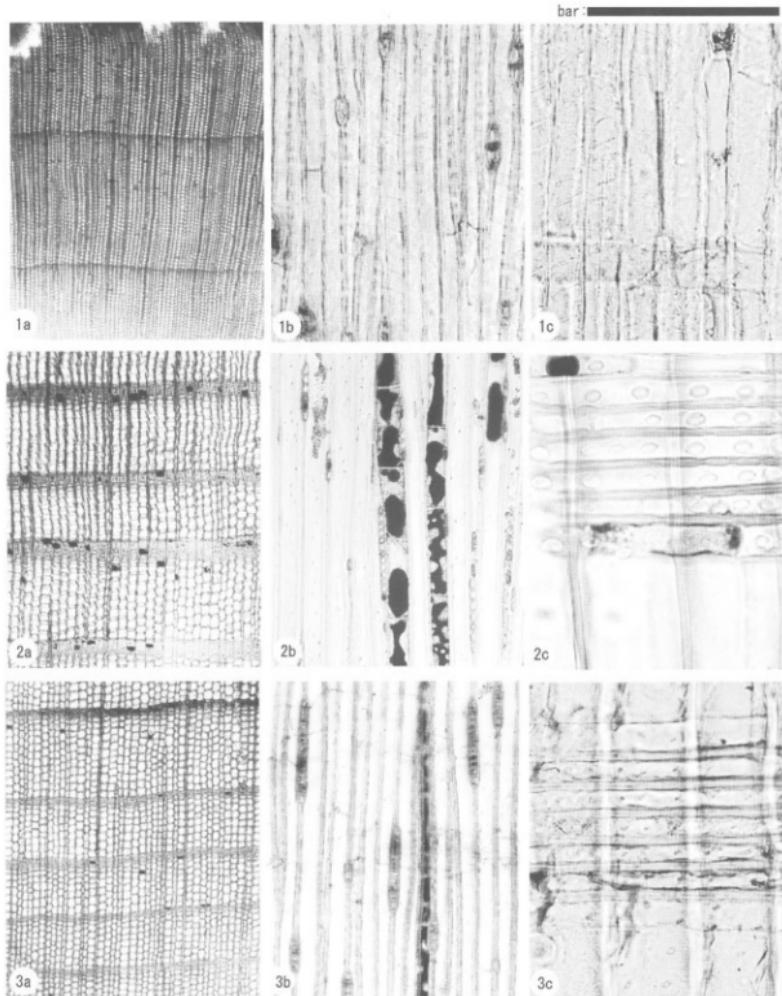
(5) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 図版2 5a-5c (W2: 横樋)

細胞幅の広い複合放射組織や集合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。接線状の柔組織が顕著である。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性、単列のものと広放射組織がある。

アカガシ亜属は常緑広葉樹で、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帶の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられる代表樹種である。

4.まとめ

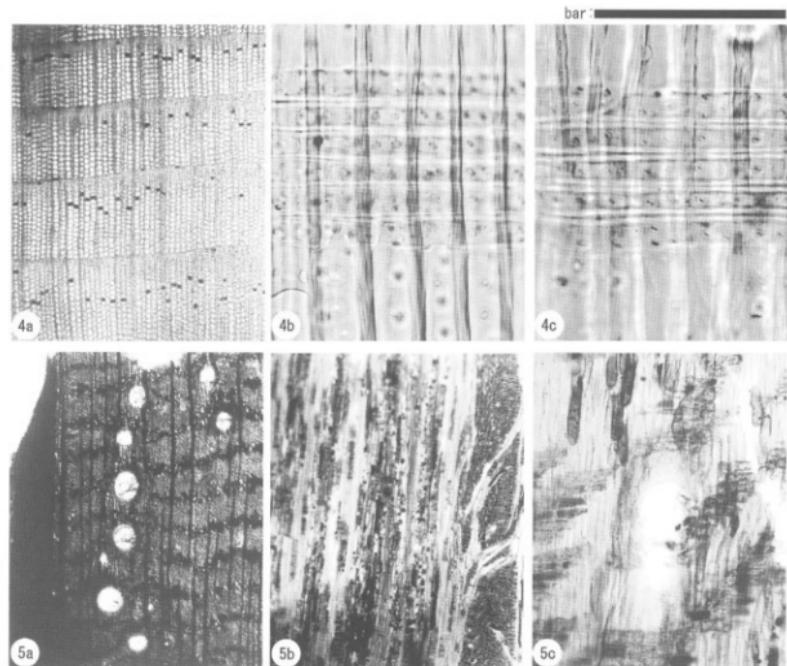
樁はスギ、横樋はアカガシ亜属、鉗先はスギ、刀形はヒノキ、建築部材・板梯子はヒノキ・ヒノキ属・スギ、弓？はイヌガヤであり、当遺跡における木製品の器種と樹種との関係は、一般的に知られている樹種選択と非常によく一致していた。



第33図 旭町白川橋遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（1）

1a-1c: イヌガヤ (W10:弓?) 2a-2c: スギ (W3:鋸先) 3a-3c:ヒノキ (W8:建築部材)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 a: 1.0mm b: 0.4mm 1c: 0.2mm 2c: 3c: 0.1mm



第34図 鮎町白川橋遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真（2）

4a-4c : ヒノキ属 (W6 : 建築部材) 5a-5c : アカガシ亞属 (W2 : 橋桟)

a : 横断面 5b : 接線断面 4b-4c-5c : 放射断面 第4章

a・5b : 1.0mm 5c : 0.4mm 4a-4c : 0.1mm

第4章　まとめ

はじめに

今回報告した調査の成果を列挙し、本報告のまとめとしたい。

調査成果

1. 調査地は、味原川によって形成された氾濫原に立地する。
2. 数次に及ぶ洪水層の堆積が認められ、この洪水層から遺物が出土している。
3. 主な出土遺物は、土器と木製品・石製品で、ほかに土鍤が出土している。
4. 出土した土器は、縄文時代晩期～弥生時代前期・古墳時代前期・古墳時代後期の3時期である。
5. 木製品は、古墳時代後期の土器に伴うもので、11点出土している。ただし、刀形については、その時期如何では大きな意義を持つものである。しかし、調査では時期を特定できるような出土状況を把握することができなかつたため、本報告では、古墳時代後期以降としておきたい。
6. 石製品は、大型蛤刃石斧と磨石の2点が出土している。

小結

以上が、今回報告する調査の成果である。調査では遺構そのものは確認できなかつたが、多くの遺物を検出することができた。旧浜坂町域における発掘調査は数例で、その調査も、芦屋城跡を除いては古墳の調査に限られ、集落跡の調査は全く行われていなかつた。今回の調査は、集落跡の調査にせまるものであり、この点に今回調査に意義を見出すことができるのではないかと考えられる。

今回の調査により、調査地の西側に想定した微高地に、上記3時期の集落の存在を想定することができる。

報告書抄録

ふりがな	あさひまちしらかわばしいせき							
書名	旭町白川橋遺跡							
副書名	二級河川味原川床上浸水対策特別緊急事業に伴う発掘調査							
卷次	兵庫県文化財調査報告 第289冊							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山田清朝・藤田 淳・植田弥生							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 Tel 078-531-7011							
発行年月日	西暦2006年(平成18年)3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	調査番号					
あさひまちしらかわばしいせき 旭町白川橋遺跡	ひょうごけんみやこく 兵庫県美方郡 しんゆざんじょう 新温泉町	28586	2000208	35度 37分 20秒	134度 27分 28秒	平成12年 7月3日～11 日	180m ²	二級河川 味原川床 上浸水対 策特別緊 急事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
旭町白川橋遺跡	集落跡	繩文時代晩期		土器 石器				
		弥生時代前期		土器				
		古墳時代前期～中期		土師器				
		古墳時代後期		須恵器 土師器 木製品	樹種同定			

兵庫県文化財調査報告 第289冊

旭町白川橋遺跡

-二級河川味原川床上浸水対策特別緊急事業に伴う発掘調査-

平成18年3月20日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 菱三印刷株式会社
〒652-0803 神戸市兵庫区大開通2丁目2-11